

『江戸六地藏建立之略縁起』の分析（類本情報のお願い）

杉本 和江

地藏坊正元は、品川寺（宝永 5 年）を初めとした江戸六地藏を建立した。発表者は、近世鑄造技術の視点から、江戸六地藏の調査を行い、その過程で『江戸六地藏建立之略縁起』（以下『略縁起』と称す）を知ることとなった。（三船温尚・杉本和江編『江戸大仏』2024 年）

建立にあたって正元が行ったのは、『略縁起』を刊行し、奉加勧進を出さないこと、寄進者が正元のもとに届けるよう記すことだった。『略縁起』とこれに類する書は、国文学研究資料館所蔵本（以下、国文研本と称す）を含めて 12 冊（うち 1 冊は、国文研本の模写）、概ね二種類に分けられることを確認している。その内容は、六地藏建立の寄進に関する部分と地藏菩薩の利益を述べた部分から成っている。なかでも、注目したいのは、地藏菩薩の利益を述べるに際し、「破地獄文」に添えられた挿図である。12 冊中 10 冊が同趣の絵柄となっている。図中、地獄の業火に落ちてゆく一人は、『和字絵入往生要集』（以下『往生要集』と称す）の寛文 11 年本の「黒縄地獄」で、釜に落ちなんとする人に酷似している。他にも、獄卒の姿などに『往生要集』との関係を強く意識させる部分がある。なお、国文研本のみ多色刷りと考えられる。

加えて、『略縁起』では、「女中がた子どもたち」も読みやすいようにと、全て平仮名だけで書かれた地藏菩薩の利益や霊験が記されており、いわゆる勧化本の要素を含んでいる。末尾の「口上」には、この『略縁起』はいつまでも手元に置いて「人々様へ御よみきかせたのみあげ候」と結んでいる。地藏坊正元の六地藏建立を支えた『略縁起』の成立には、出版文化の隆盛に加え、唱導文化の影響があったと考えられる。

こうした『略縁起』の分析を通して、近世の造像活動、特に鑄造像製作の社会的・文化的背景を明らかにしたいと考えている。なお、発表者は、『略縁起』の流布した状況とバリエーションを明らかにするため、類本の情報を求めている。